

はしがき

この書に『近世演劇雑考』と題したが、その大部分は人形浄るりに關してである。されば實は『操雑考』とでもいふべきであつたらうが、二三歌舞伎に關するものを、捨つるに鶏肋の感ありて、「近世演劇」を冠する事とした。

その収録するところ、昭和六年以降同八年に及ぶ三ヶ年の間の筆に成るものゝ内から、劇評時評めいたものを省いたのである。即ち昭和五年六月に拙い『人形芝居雑話』を世に問うて以來、勾欄藝術に關する私の筆が、稍々概論の域を離れて、多少研究的の傾向を帯びて來た頃の雜文である。言葉を換へるとジャーナリスチックからアカデミツクに推移して來た、私自身の研究道程

の一里塚である。

故に私にとりては反省の機會が與へらるゝところが多かつたが、讀者にとりては、迷惑かも知れぬ。

即ちこの書の校正を、今、終つて、私は忸怩たるものがある。かうして三ヶ年間の私の研究の跡を顧みると、同じ事を度々繰返へして言つてゐる。例へば『三人遣ひ人形の原流』についての如きがその一つである。——といふ事は、三ヶ年間、私の研究が目ざましく展開しないで、同じところに、たたらを踏んでゐたといふ事をまぎ／＼と見せつけられた事となつた。

これではならぬ——と、私は胸の引締るを、今覺えてゐる。が、同じ事を繰返へしてゐる點や、八重になつてゐる事例を整理すると、「考」が「考」にならぬから、見ぐるしい一里塚を、そのまゝにして私自らを鞭打つ策としておいて、私は更らに進まうが、讀者の迷惑はこの點にあらう。

が、更らに願みると、こんなお恥しい雑考をも、尙その操研究に、何かを
貢献しえようではないかと、自ら信ずる。この點がこの蕪雜なものをも、敢
へて世に送る所以である。この書は、言はゞ操史の飛石、捨石になるもの
と、私は信じてゐる。

昭和九年九月十四日のあかつき

東京牛込原町の書屋にて

石 割 松 太 郎

